

## 西村助之丞 にしむら・すけのじょう [? ~ 1819]

—— 栗見出在家の開村の恩人

愛知川は古来よりあばれ川として知られ、その河床は何回も場所を変えています。これは年々上流より運んでくる土砂が積り、河床が高くなり、洪水が堤を破って流出し、流れを変えた結果です。

現在の河床は少なくとも、寛文の開拓の結果できた栗見新田村の開村以前と考えられています。

栗見出在家村の開発は、文化3年(1806)彦根藩の奉行である西村助之丞が開発御用掛に命ぜられたことにはじまります。助之丞は現地に出張し、新田・福堂・乙女浜・宮西・川南・阿弥陀堂の6カ村から7戸ずつ、42戸を選抜して移住させ、1戸に田地3反・畑地2反と宅地4畝を与え、自宅の建築にも補助金を与えました。

道路は東西に二筋の道を通じ、中央に水路を造り、湖水に通じるようにして船の便を計りました。

また新村のおきてを定めましたが、それには、どれほど貧乏しても土地を売り払わない、商売をしない、養子・嫁取りは町人は駄目、古風で精を出す働き者で、人柄の良いものをもらえなどと、細かいことを決めています。開村のときに氏神として神明社を創立しましたが、文政2年(1819)助之丞が亡くなるや、村人たちはその恩をしのび、湖辺に崇敬の社を建てました(のちにこの社は神明社の境内へ移されました)。



出在家浜



昔の水路

## 超然 ちょうねん [1792 ~ 1868]

—— 詩歌にすぐれ、宗門護持に勤めた学僧

福堂の村外れ、昔は湖に面したところに、「柳荷荘」(夕陽楼)という覚成寺の別業があり、その庭に赤松連城が記した「高尚院超然師碑」が建っています。

この碑文によると、超然は彦根高宮・円照寺の次男として生まれ、17歳で覚成寺に入り、その後本山の学寮に入って研鑽に努めました。

宗政にたずさわったときには、学林(学校)に宗義上の争いが起こり、二派に分かれて争いましたので、そのときには両派の融和を図り、事なきを得ました。

外交・国防問題にも持論をもち、維新の志士とも交わり、とくに僧月照とは手紙のやり取りを行うなど、国の将来についていろいろ考えていました。

若いときから詩歌に長じ、歌は香川景樹、詩文は中川漁村の指導を受けました。また50余冊の日記を残し、死の4日前まで記しています。公刊された著書は16巻、内5巻は『真宗全書』に収められています。また未公開のものは61冊にのぼります。

嘉永4年(1851)60歳のとき、嗣子に寺務を譲り、村外れの柳荷荘に移って、もっぱら著述に専念しました。



超然



柳荷荘全景

## 波多野正平 はたの・しょうへい [1813~92]

——文人肌の芸術家、能登川の風土を愛す

湖東地方には「日本亀文」との銘のある鉄瓶が残っています。これは町内能登川の元役場の建物に住んでいた波多野正平の作であって、現在も美術品として高い評価を受けています。

初代亀文は家業の醸造業を継がず、京都の龍文堂四方安平の弟子となり、のちに独立しました。豪放磊落、風雅を志す文人肌の芸術家で、酒を好み、家計をかえりみることがなかったと言われていました。

また頼山陽の教えを受け、またその子の頼三樹三郎らの勤王の志士との交友があったため、安政の大獄にかかわり、幽閉されたことがありました。

元治の兵火で家を失い、近江信楽の代官多羅尾氏を頼って身をよせ、のちに日野に移り、最後には能登川に

亀文の鉄瓶



居を移しました。それはこの地の山水をたいそう好んだためであるとされています。

初代亀文の作として有名なものは、江戸湯島の聖堂の飾りに使用した72個の銅器です（現在は所在不明です）。いまま鉄瓶・茶釜・火鉢・文房具などは美術品として尊重されています。

## 岡崎三達 おかざき・さんたつ [1815~94]

——書画・文学に優れた、淡泊・無欲の儒医

三達は愛知郡元持の池田家から、種村の岡崎家に入った人で、家業の儒医を継ぎました。

その性質は淡泊・無欲であって、ほとんど算数を知らずと言われました。

書は貫名海屋に学び、画や和歌・俳句もよくしました。付近はもちろんのこと、遠く伊賀上野・伊勢松坂などにも門下生が多くいたようで、その地方には遺作が残っているということです。

作品としては『越溪詩集』があり、その他若干の遺稿が残っています。

## 佐野理八 さの・りはち [1844~1915]

——生糸を改良し、アメリカへ輸出

日本の国産品の生糸をアメリカに直輸出した最初の人として知られています。

理八は町内鍛冶屋村（佐野・佐生に属する小字）の人で、幼いときより五個荘の外村与左衛門方に奉公し、のち独立して、福島県二本松城址に製糸工場を開き、明治8年（1875）には明治天皇の視察を受けました。

また、アメリカでは日本の生糸の粗製なのに懲りて輸出が減少していましたが、理八は生糸を改良して大いに輸出を増やしました。

理八は内地同士の商売は国の富を増やさないので、外国と交易して外貨を得て真の富を形成すべきであると常々言っていました。

## 佐野丹造 さの・たんぞう [1853~69]

——敬神の念篤く、付近の子弟を教育した神官

丹造は町内神郷にある式内社・乎加神社の宮司の家に生まれ、神を敬い、徳を養い、付近の子弟を教育したので、村人に敬慕せられました。

その死後には、教えを受けた人々が集まって、立派な顕彰碑を名島（成島・梨間）に建てました。

いまま残るその碑文には、その人柄を述べるとともに、維新の際、京都御所の警護に当たるなど、勤皇の志が篤かったことなどが述べられています。



佐野丹造顕彰碑

## 田附政次郎 たづけ・まさじろう [1863~1933]

——田附将軍の名を残す

町内佐生に生まれ、伯父伊藤忠兵衛の紅忠へ丁稚として入り、のち独立し、一代で産をなしました。湖東紡績（現在の日清紡）を設立するなど、郷里の産業にも意を用いました。

また、財団法人田附興風会を設立、京都大学医学部へ北野病院（大阪北区）を寄付し、五峰に興風会館をつくり、文化・教育に尽力しました。

## 河崎仁左衛門 かわさき・にざえもん [1853~1920]

——運輸・治水など地方自治に尽くした県会議員

仁左衛門は町内福堂の大沢家に生まれ、種油搾取販売を業としていた跡光寺の河崎家に入り、家を継ぎました。

明治22年(1889)7月、東海道線の湖東線が開通して、能登川駅ができたとき、駅前に進出し、運送業を開業しました。

のち、県会議員に選ばれ、治水の問題や瀬田川の浚渫

などの問題に力を尽くしました。このことが、のちに瀬田川の浚渫工事が行われる要因となりました。

また、県庁の彦根移転問題にも力を尽くしましたが、そのことは実現しませんでした。

当地方の産物である菜種を絞る製油会社を設立しましたが、これは失敗に終わりました。

## 阿部一族

——豪商として活躍

阿部家は大字能登川の豪商で、紅市・布市と称し、麻布を取り扱い、代々市郎兵衛の名を襲名しました。

とくに第6代の浄廉は人徳があり、世の信用を得て、3人の弟とともに商勢の発展に尽くしました。なかでも北海道の交易に力をそそぎ、米・雑穀やさば・鱈・干鰯などの肥料に変えたり、若狭の海産物、奥州の紅花、丹後のちりめんなどを大量に買い取り、交易を盛んにしました。

第7代の蓮永は浄廉の弟・市太郎の子で、宗家を継ぎ、さらに家運を隆盛に導きました。

### 沙々貴山君

蒲生郡の沙々貴山君とともに、大領として神崎郡を支配した古代の名族です。

史書には「大領沙々貴山君足人に正六位を授ける」という記録があり、平安時代になっても、この氏族の名はしばしば見られます。

大字山路の上山神社蔵の大般若羅蜜多經の奥書に「佐々木重貞」とあるのも、この一族であろうと思われます。

のちにはこの氏族は、近江源氏の佐々木氏と混同してしまうようです。

### 桑原史人勝

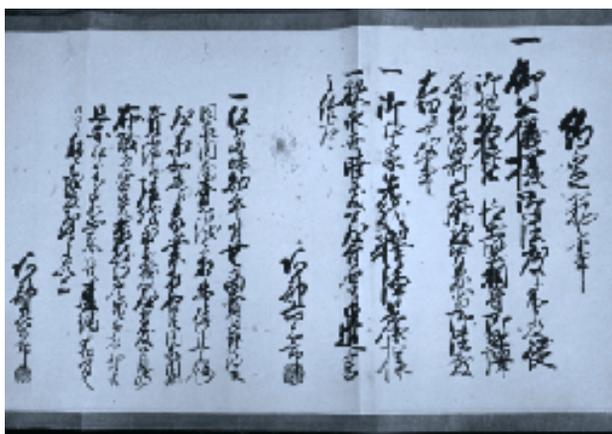
能登川地方に住んだと思われる中国系の渡来人で、多くの人の頭でした。

### 上田丈助

新宮の人で、明治維新の頃、地方自治のために活躍しました。

### 了念

湖東地方に念仏の教えを伝えた佛光寺系の僧。松の木より現身往生したと伝えられています。



阿部家所蔵の文書



了念の記念碑(伊庭・妙楽寺)